

スィーパトゥム大学ボランティアプログラム

2009年2月1日から3月31日にかけて、タイのスィーパトゥム大学で日本語を教えるボランティアプログラムに参加しました。海外の教壇に立ってみて感じたことや、ホームステイ先での出来事など、二ヶ月間を振り返ってみたいと思います。これを読んで、少しでもタイや日本語教育、そしてスィーパトゥム大学のプログラムに興味を持って頂けたら幸いです。

◎スィーパトゥム大学ってどんなところ？

タイ王国バンコクにある私立大学です。教養学部やエンジニア学部など様々な学部があります。日本語を勉強しているのは、教養学部のホテル観光学科と英語学科の学生です。

◎学生は何故日本語を学んでいるのか？

ホテル観光学科という名前からも分かるように、学生は将来ホテルのスタッフやガイドとなることを目指しています。タイへ観光に来る日本人はとても多いです。そんな日本人観光客に対して、日本語で説明や案内をするために学生は日本語を学んでいます。

日本国内の学習者が、実用的な日本語を日々勉強しているのに対し、タイの学生は仕事で使用する日本語を学んでいます。この点が、国内・国外の日本語教育の大きな違いと言えると思います。

◎どんなボランティア活動をしたの？

1、TA(ティーチング・アシスタント)

海外の日本語学習者は、授業外において日本語に触れる機会がほとんどありません。得た知識を運用する場がないため、授業内でそれを補うための活動が必要となります。TAは主に、その活動を担当しました。授業の前半に担当の先生が説明された文法表現を、TAは後半50分を使って文型・会話練習をします。実際の場面ではどのように使うかを練習の中で理解してもらうのが活動の目標です。

授業の打ち合わせからフィードバックまで、担当の先生がサポートしてくれました。その一連の流れを説明します。

①準備

大体一週間ほど前から準備にかかります。その課での学習目標は何かというのを、教科書を読みながら考え、少し活動のイメージがわいてきたら、担当の先生と授業の打ち合わせをします。逆にどんな活動をしていいのか思い浮かばないときも、先生に相談しに行きます。

そんなときも優しくアドバイスしてくださいました。

どのように授業を進めていくかを考えたら、教案を作成します。その後再び教案を見ながら先生と打ち合わせをし、OK をもらったら授業の練習に入ります。絵カードを使用するときは、その作成も行ないます。

②実習

先生に見守られながら授業をします。タイの学生はみんな優しいので、リピート練習も大きな声でしてくれます。

③フィードバック

担当の先生も一緒に授業の反省をしてくださいます。「ここがダメだった」という指摘ではなく、「こういうやり方もある」というようなアドバイスをしてくださるので、落ち込むというよりむしろ次の授業へのやる気で満ち溢れます。

↑ときにはマックで打ち合わせをすることも…

↑ポスターほどの大きさの教材も作りました

・「(バー)は(5階)でございます。」

・「(バー)は(19時)から(23時)までとなっております。」

の文型練習で使用しました。

授業は直説法(日本語のみ)で行うので、初級の簡単な日本語だけで自分の持っていきたい流れに学生を誘導するのが難しかったです。教師側の視線だけで考え、学生がどう授業を受け止めていくのかを無視すると、誘導に失敗しーからやり直し、ということも起こります。常に学生の視点を忘れずに、というのを課題に授業に取り組みました。

2、インタビュープロジェクト

海外の日本語学習者は実際に日本語を使う機会が少ないことを、先ほど述べましたが、少しでもその機会を増やすためにインタビュープロジェクトを行ないました。場所は、バンコクに来た日本人観光客が必ず訪れるというエメラルド寺院です。日本人観光客に日本語でインタビューをし、聞いた答えを日本語で書く、という活動は少し難しそうでしたが、みんな終始笑顔でした。

「タイ料理は何がお好きですか」「いつ日本へお帰りになりますか」などの質問をしていました。

↑日本人観光客にインタビューをする学生

3、はなしましょう

30～50人のタイ人学生に1人の日本人がつき、お互いの空いた時間に15分間日本語で話をする、という活動もありました。

好きな歌手の話から、何故タイにはゲイが多いのかという深い話まで、楽しくお話をしました。

↑“はなしましょう”常連の四人組です

4、かわいいまつり

日本語と共に、日本文化にも触れてもらおうと開いたパーティです。浴衣を着たり、折り紙で鶴を作ったり、またすし作りも行ないました。クラスもレベルも違う子がみんなごっちゃになって、日本語で話をしていました。

↑みんな真剣に巻き寿司を作っています。

↑折り方をマスターした学生が友達に教えてあげています

↑お気に入りの一枚。クラスの盛り上げ役の二人です。

5、他大学の日本語教師との交流

タイの大学(ドゥラキッジバンディット大学、シラパコン大学)・高校(サラウィッタヤー高校)で働いていらっしゃる先生や、JENESYSでタイに派遣されていた先生のお話を伺う機会がありました。

日本語に触れる機会の少ない海外では学生のモチベーションも下がりやすいそうで、突然外で活動を試してみたり、歌を教材として使ってみたり・・・という工夫が必要になるそうです。やはりどの現場でも問題になっていたのは、“いかに日本人と話す機会を増やすか”ということでした。エメラルド寺院でのプロジェクトのように、授業の一環として課外活動を行なうのが一番効果的だそうです。インタビュープロジェクトのほかにも、タイ在住の日本人に、実際にタイの観光地を案内するというプロジェクトを課している大学もありました。

↑話を伺うだけでなく、高校の授業にも参加させていただきました。
高校生は元気いっぱいかわいいです！

6、セミナー・ワークショップへの参加

タイで働く日本人教師のためのセミナーやワークショップが、定期的に行なわれているそうです。私が行った二ヶ月間でも、二つの講演会に参加することができました。一つは、ダブルリミテッドに関するセミナーで、もう一方が教育現場における協働についての講演会・ワークショップです。

実際に日本語教師として働いていらっしゃる先生方とグループになって、意見交換をするのは緊張しましたが、とても勉強になりました。「今の自分の授業が最高だ！」と考えている先生はもちろん居らず、どうすればより良い授業・学校が作れるかという問いの答えに少しでも近づけるために、こういった講演会に参加しているのだなと感じました。

また、こういった講演会をきっかけに知り合いになる先生が多いそうで、一つの交流の場としても機能していました。

◎滞在先はどこ？

スィーパトゥム大学で日本語を勉強している学生の家で、ホームステイしました。なので家での会話は、主に日本語です。ただ、そのホストシスターは初級の日本語しか勉強していないので、初級の単語・文型を意識しないと通じないことが多いです。また、学生の両親は日本語を勉強されてないので、私のカタコトのタイ語でコミュニケーションをとりました。でも「こんにちは」や「行く」「おいしい」しか話せなかったのも、表情やジェスチャーで会話することのほうが多かったです。

休みの日には、アユタヤへ遺跡散策に行ったり、家で日本料理を作ったりしました。

↑ホストファミリーの家。この子は近所の子です

↑ワット・チャイ・ワタナラームで

◎終わりに

あの二ヶ月間があまりにも早く過ぎていったためなのか、帰国から今に至るまでタイでの出来事をうまく思い出すことができませんでした。今こうして振り返ってみても、タイで学ん

だこととは一体何か、という問いに答えることが出来ません。学んだことが無いということではなくて、ただひとつの言葉に集約できないのだと思います。

日本語教師という面から考えると、確実に自分の中でその仕事の存在が大きくなったと感じます。プログラム参加当時2年生だった私は、「将来日本語教師になりたい？」という先生の見かけに対して「日本語教師にも興味があるが、企業就職にも興味がある」という曖昧な返事をしたのを覚えています。そのとき先生に「じゃあ企業のほうがあっているかもしれない」と言われ、確かにそうかもなと思いました。しかし今「企業に就職しよう」ということを考えたとき、「じゃあ日本語教師はどうするの？」という言葉が出てくるようになりました。上手くいえないのですが、以前は企業で働いている自分の姿が容易に想像できたのに対して、今は日本語教師として教壇に立っている姿のほうがしっくりくるような気がするのです。しかし未だ先生の最初の問いにははっきりと答えられないので、残りの二年間を使って答えを見つけられればと思います。

もしこの「振り返り」を読んでボランティアプログラムに興味を湧いた方がいらっしゃいましたら、何か力になれると思うので、気軽にご連絡ください。

日本語日本文学科3年 佐藤 麻衣